

2023.10 no.96



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第八回 日本建築美術工芸協会賞「モエレ沼公園」
(撮影：飯田 郷介)



プレイマウンテン



テトラマウンテン



ミュージックシェル



日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会の目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第八回 日本建築美術工芸協会賞受賞（1998年）

受賞作品 モエレ沼公園

受賞者 設計 札幌市、アーキテクト・ファイブ

監修 イサム・ノグチ

〈選考委員講評〉 委員長 内井昭蔵
委員 曾田雄亮 栄久庵憲司
近江 栄 澄川喜一（敬称略）

183haのモエレ沼はゴミ集積による埋め立てと同時に公園整備として彫刻家イサム・ノグチ氏のマスタープランによる工事が進められ6割余が完成、今年7月にオープンした。

遊具エリア・水深30cmの徒歩池・雄大な稜線を持つプレイマウンテン、それに連なるテトラマウンテンは、三本のステンレス円柱を空中で結合させ、三角錐の強い緊張感を創出、内懐にふくらみのある土盛りの円形を包括し、鋭い直線と曲面を交響させており見事である。プレイマウンテンの広がりのある階段状の石積み三角形と、のびやかな稜線への共鳴感は特に美しい。

ミュージックシェルや諸施設は総て自然と造形物が共生するよう配慮され、優れた環境となっている。自然と人間の関係が密になる、大地に刻まれた大きな彫刻である。

素晴らしい計画が一日も早く完結されることを期待したい。AACAA賞に最適の造形である。（澄川喜一 1999年4月）

- A** サクラの森（遊具エリア）
- B** モエレビーチ
- C** プレイマウンテン
- D** テトラマウンド
- E** ミュージックシェル
- F** アクアプラザ
- G** 海の噴水
- H** ガラスのピラミッド「HIDAMARI」
- I** 陸上競技場・管理棟
- J** 野外ステージ
- K** モエレ山
- L** 野球場
- M** フィールドハウス（スポーツ施設受付）
- N** テニスコート

（モエレ沼公園案内図より）

（撮影：飯田郷介）

CONTENTS

■第6回 BOX 展

開催報告	フォーラム委員会	4
第6回 BOX 展を顧みて	岩井光男	5
受賞作品		6
入賞作品		7
最優秀賞を受賞して	神まさこ	10
特別賞を受賞して	阿部剛士	11



▶▶ 4

■会員活動レポート

私が影響を受けた彫刻家と音楽家	池田嘉文	12
モンゴルとの文化交流イベントに参加して!	山崎和子	13



▶▶ 18

■展覧会活動報告

		14
--	--	----

■法人会員の企業活動紹介

emo 株式会社/株式会社六花亭		17
------------------	--	----



▶▶ 20

■法人会員の企業活動を訪ねて

YKK AP 〈Part 2〉	広報委員会	18
-----------------	-------	----

■寄稿

イサム・ノグチ念願の夢の「野外美術館・モエレ沼公園」	飯田郷介	20
----------------------------	------	----



▶▶ 26

■追悼展「坂上直哉の足跡をたどる」

坂上直哉を偲ぶ会	露口典子	24
----------	------	----

■会員増強委員会だより

第9回 aaca サロン開催報告	古賀 大	26
------------------	------	----



▶▶ 27

■フォーラム委員会だより

第202回 aaca フォーラム開催報告	飯田郷介	27
----------------------	------	----

■事務局だより

		28
--	--	----

第6回BOX展 - 30cm×30cm×30cmの空間を遊ぶ -

開催報告

今回も多くのご応募をいただき、出品者の方々、各方面の皆様にはご協力をいただき感謝申し上げます。

1、事業企画名：第6回BOX展—30cm×30cm×30cmの空間を遊ぶ—

2、企画内容：30cm×30cm×30cm立方空間を自由に使用した作品による展覧会。平面・立体・表現方法は問いません。

3、目的・対象：国籍、年齢、プロ、アマ、aaca会員、一般参加を問わず募集し、建築・美術・工芸など様々なジャンルと自由な素材を使用した、多様な表現の場となり、交流の場となることを目指しています。優秀な作品と人気作品には賞状と協賛各社の副賞を授与。作品制作を応援しaacaの活動の一環として社会的な意義を広め高める事を目的としています。

4、会期：2023（令和5）年6月3日（土）～9日（金）
表彰式：6月9日（金）

5、搬入：2023（令和5）年6月2日（金）10時～
搬出：2023（令和5）年6月9日（金）16時～

6、会場：建築会館1Fギャラリー

7、受賞者

最優秀賞：神まさこ（会員）	「終結」
優秀賞：横沢和則（一般）	「青の痕跡」
中嶋クミ（一般）	「VOID」
特別賞：阿部剛士（一般）	「1945・H」
佳作：池田嘉文（会員）	「マドリガル」
熊木眞由美（会員）	「作品」
齋藤潮美（一般）	「思陵 Lang Donh khanh」
笹岡かおり（一般）	「ヒツジの部屋」
北村うた（学生）	「JAZZ」
オーディエンス賞 鈴木法明（会員）	「1/2」

選出方法は、審査員の点数の合計点。オーディエンス賞は、来場者の投票による集計の最高得票作品。

フォーラム委員会

8、審査員：aaca副会長 岩井光男（審査委員長）

総務委員会委員長 二本柳 敏、会員交流委員会委員長 青木崇、文化事業委員会委員長 木村 慶太、表彰委員会委員長 可児 才介、情報文化研究委員会委員長 露口 典子、フォーラム委員会委員長 萩尾昌則、広報委員会委員長 飯田郷介、会員増強委員会委員長 芝山哲也

9、協賛：株式会社アトリエトラベル、株式会社エフワンエヌ、大成建設株式会社、横浜ビル建材株式会社、株式会社クサカベ、株式会社文房堂、株式会社名村大成堂、クラフトー2、光ステンド工房

10、実行委員：フォーラム委員会 飯田郷介

11、応募点数：42点（会員24点、一般17点、学生1点）

12、来場者数：230名

（敬称略）



日本建築美術工芸協会副会長
BOX展審査委員長
岩井光男

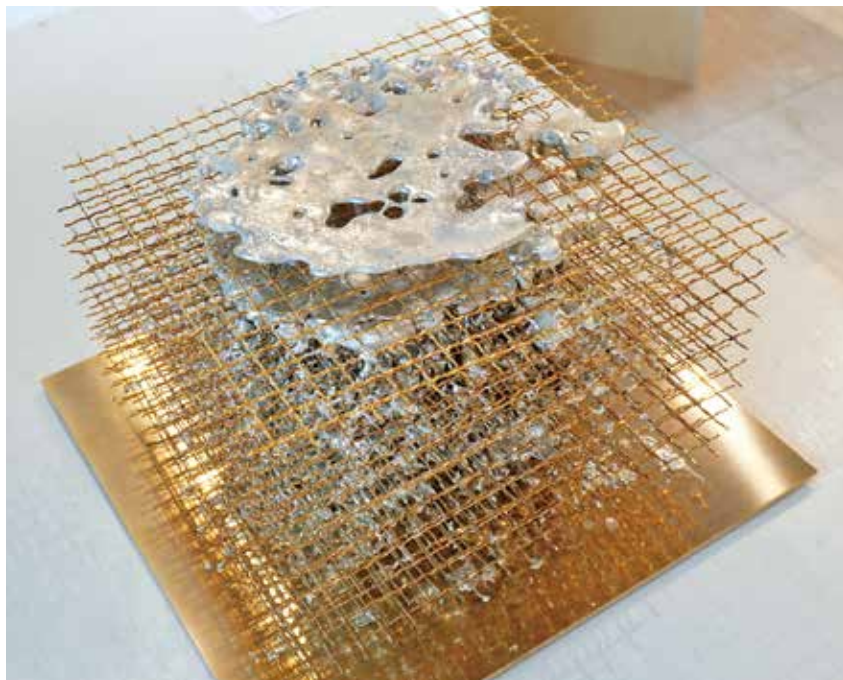
第6回BOX展を顧みて

今年も多くの方々にご参加をいただき楽しいBOX展になりました。作品を展示していただいた作家の皆様、BOX展をご高覧頂いた皆様に心からお礼申し上げます。一辺30cmの立方体の限られた空間でのアートですが、作家によって表現されるものはその枠に制限されない自由で、世界に一つしかないオリジナリティを感じました。今年、BOX展は第6回となりますが、毎年参加していただく作家は今年、どんな作品を出してくれるのだろうか、新しく参加してくれる作家はどんな人だろうか、作家と作品との出会いが楽しみなBOX展になってきたように感じています。このBOX展における作品の各賞は作品をご覧になったギャラリーとaacaの会員の投票による人気投票で決まります。多様性が重視される時代、人々がアートから受けるものは一様ではありません。ここでは私が作品に感じたことを少し述べさせていただきます。最優秀賞の神まさこさんの「集結」は、金色の網を重ねた上に錫を溶かして落とした空間的な動きがよく表現された作品で、皆さんに支持されたと思います。金色に銀色でとても華やかな感じもしますし、色々な感じを受けますと思いますが、私自身は、福島原子力発電所の原子炉で燃料棒が溶けて下に落ちているというようなイメージを持ち、現代の色々な社会的な問題を凝縮させた作品というように感じました。次に優秀賞の横沢和則さんの「青の痕跡」は、コロナ禍の中で毎日、毎日感染者の数が棒グラフで出てくるということをイメージしてこのような作品になったということですが、これも時代を表現した作品だと思います。同じく優秀賞の中嶋クミさんの「VOID」は、ガラスという素材をうまく作品に取り入れ、穴を覗くと色々な光の屈折から空間を感じるということで大変面白い作品ではないかと思います。特別賞の阿部剛土さんの「1945・H」は、ハンガーとクリップを使った空間表

現で、見る人を終戦時へタイムスリップさせ、ノスタルジーを感じさせる作品でした。佳作の池田嘉文さんの「マドリガル」は繊細な作品で6人の女性が踊る姿を非常に軽やかに感じるようなリズムカルな作品で心が楽しくなる作品でした。熊木真由美さんの「作品」は、布を使い、布が生きているような構成で面白く感じました。齋藤潮美さんの「思陵 Lang Donh khanh」は、漆、和紙を使い、中国の古典的な空間を表現したもので、見る人を古い時代に誘うような作品でした。笹岡かおりさんの「ヒツジの部屋」は、羊毛をいつも使っていただいて、今度も非常にファンタジックな空間を作って、作品の前に立って見ると大変心が和む、楽しい時間を過ごせそうな作品だと思いました。北村うたさんの「JAZZ」は、白い一枚の紙を立体的なものにしているという作品ですが、1枚の紙で立体的につくるというのは大変難しいことです。北村さんはまだ高校生ですがaacaの展覧会にこのような若い人がチャレンジしてくれることは大変素晴らしいことだと思います。オーディエンス賞の鈴木法明さんの「1/2」は、いつもながらの大変エネルギッシュな作品を出していただきましたが、今回は今までとは違った鈴木さんの側面も拝見させて頂きました。以上私の感想を述べさせていただきます。地球温暖化による環境問題、食糧問題、パンデミックなど私達が住む環境は悪くなるばかりですが、そんな社会を明るくするのはアートの力ではないかと考えています。みなさんの作品を見させていただき、ガラス、布、紙、皮革、金属などいろいろな素材を使いアート作品を自在に創り出す作家の方々の力が今の世の中で期待されているのではと感じました。皆さんのご協力によって第6回BOX展は大変盛り上がり、楽しいものになりました。どうもありがとうございました。

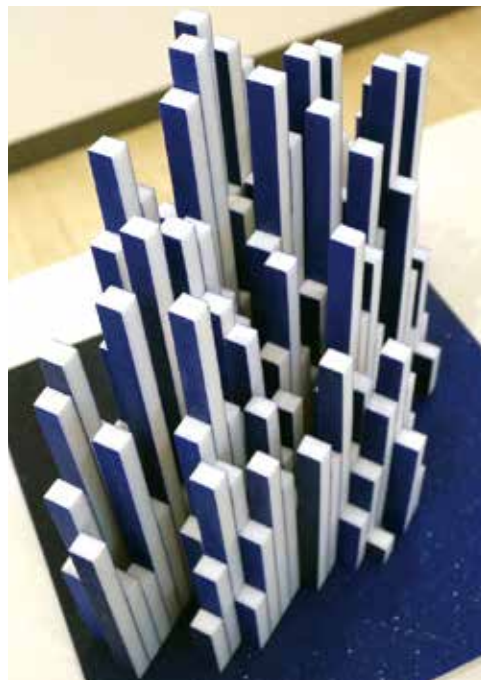


●最優秀賞



神まさこ 集結
錫・メッキ金

●優秀賞



横沢和則 青の痕跡
硬質発泡アクリル 他

●優秀賞



中嶋クミ VOID
ガラス

●特別賞



阿部剛士 1945・H
ハンガーゼムクリップ・ダブルクリップ 他

●オーディエンス賞



鈴木法明 1/2
ステンレス ペイント

●佳作



池田嘉文 マドリガル
FRP ステンレス

●佳作



北村うた JAZZ.
ケント紙

●佳作



熊木真由美 作品
布

●佳作



笹岡かおり ヒツジの部屋
羊毛 ワイヤー

●佳作



齋藤潮美 "思陵 Lang Donh khanh"
漆・和紙

出品作品



山崎哲夫 耀 (かがやき)
スプルース・檜他



飯田郷介 SDGs 続けられますか
プラスチック



池田嘉文 AwAken (目覚め)
ブロンズ・鉄



高須好子 流 (りゅう)
布地 糸



山崎和子 Time on Time C
布



西 幸恵 KA・KI・TSU・BA・TA
木枠 イラストボード 他



大河内久子 月夜に
FRP・イラストレーションボード



久野博美 森の妖精
絹・綿・刺繍糸他



鈴木法明 威嚇 (イカク)
チタン

出品作品



山崎輝子 待ち合わせ
アルミ板・レザー・小枝



松本治子 甦るジプシーガール
大理石・ズマルト・モルタル



五十嵐通代 溶化
生糸・テグス・他



青木峰男 9Hole Golf Club
陶土・ガラス・他



齋藤卯乃 生命の模様
漆



柏尾 栄 憧れのLucie
陶器



五十嵐里美 深い海
麻布・和紙・糸



平山健雄 迷路空間
ガラス



渡辺雅子 Worlds Apart Fair
ミクストテクスチャ



上江洲牧子 箱庭 考察
ガラス・鏡・植物・他



神 芳子 窓のない家
藤



品川未知子 Spring
アクリルボックス・布染・刺繍



寺本沙香江 宇想
創作フェルト・金属



上村伴子 Cubic Miracle
シナベニヤ・他



深尾雅子 Are you Human ? or A.I. ?
ウール・糸・他



高橋衣純 風の向こう
スパークオーガンジー



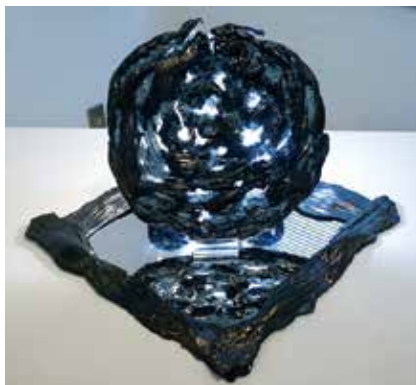
青木明美 ふくろう
紙



隈井純子 Siesta 戦士の休息
銅・布・木



青木邦真 縄文球
テラコッタ



須齋尚子 SPARKLE ~ Magic of Light
陶土・ガラス



金原京子 雷雲
ペットボトル・木・他



岡本 賢 作品Y
陶器



稲垣ひろこ 幻影の森~ Phantom Forest ~
FRP・アクリル板・水彩紙

最優秀賞を受賞して

造形作家
現代工芸美術家協会本会員
日本建築美術工芸協会会員
神まさこ



この度は、思いもかけず最優秀賞を頂戴し、誠に光栄に思います。まだまだ至りませんが審査して下さった先生方々、会を運営して下さった方々に心より感謝いたします。皆様様に貴重なご講評を頂きました事を心して、精進したいと考えております。

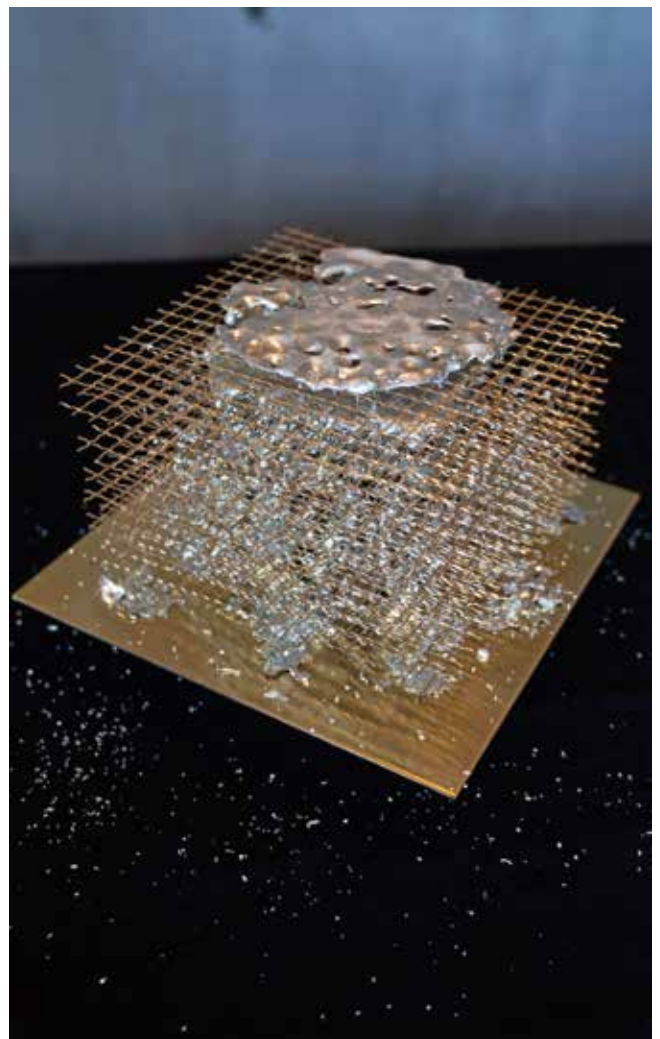
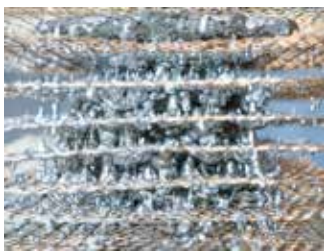
BOX 展は奥深く、毎年多くのことを考えさせられます。単に30センチ以内の作品を作れば良いというわけではなく、その大きさに合った表現を模索する必要があります。それから、自分への課題として、毎回違う素材で制作すると決めていきます。なぜなら、私は、その方が一つの素材にとらわれず、より純粹に自分の表現と向き合えるからです。

今回の作品は、素材として金色の網と錫を使い、無機質な網と、際限なく形を変容させる錫との対比を活かしてみようと考えました。

通常は固体として存在する錫が、熱により液体と化し、金網の隙間を絡み落ち固まっていく。その一瞬を捉えることが、私にとって大きな挑戦でした。静が動となり、一滴ごとに緊張が伴う、集中力と忍耐力が必要な制作となりました。

搬入日が迫る中、今回の地道な制作は焦りや苦悶が多いものでしたが、次へと繋がる大きな一歩にもなりました。この一滴ごとに錫の雫を見守る作業は、己と向き合う修行のような制作ですが、さらに挑戦したく次の制作も始めています。

また、BOX 展は自分の作品と他の作家さんの作品との関係性を考える機会にもなりました。同じ枠組みの中で、様々な表現が生まれるのを目の当たりにし、多くの刺激を受けました。最後に、このような素晴らしい機会を与えて下さった主宰者の方々、参加された作家の方々に、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



《集結》

特別賞を受賞して

大成建設株式会社 品質管理本部
東海大学建築都市学部建築学科非常勤講師
現代美術家
日本建築美術工芸協会法人会員
阿部剛士

2023年の第6回BOX展にて、特別賞をいただき、驚きとともに喜びを感じております。

2009年より美術活動を開始し、各地のアートプロジェクトやアーティストレジデンスにて作品を発表。一昨年から横浜関内の共同スタジオにて製作活動を行っておりますが、今回のような公募展に出展するのは初めてとなります。

・作品製作のコンセプト

40代前半まで建築現場の監督をしており、建物を作る段階（もしくは何かを製造した段階）での各種廃材や工業製品、部品、使用済みの製品等という生産や工業での発展に伴う廃棄物に対して「美術の介入により何かに再生できないだろうか？」が作品製作発想の原点であり、もともと存在した製品に対してその素材が極力判るようになるべく「チープ」に製作するよう心がけています。



この写真は2010年に都筑アートプロジェクトに出展した「盆栽MH」という作品で、横浜市のマンホールの穴や隙間に苔や小石が入っている姿が盆栽に見えたことから思いつきましたが、横浜市のマンホールが売っていないので、実物をフロタージュ、12mmベニヤに転写して切出し刀で掘り、工業用漆を5層塗り重ねて錆鉄色を再現しました。横浜の都筑民家園の庭に展示しましたが、残念な事に鑑賞に来た知人の多くから「作品がどこにあるか判らなかつた！」との苦情がよせられて、「秘密兵器」が秘密で終わってしまった作品です。

・今回の作品について

① BOX展主旨である「30センチスクエア」を守る。

以前、針金ハンガーでのフレーム作品を製作した事から今

回1辺30センチの針金ハンガーを探し購入。展示後解体搬出が容易な様にダブルクリップにて固定してフレームを形成しました。

② 汎用製品で作品を形成する。

ライフワークとして「戦争」をテーマに製作をしています。その中でも「大東亜戦争時の空襲」に対して、B29をゼムクリップで作りつづけており（横浜大空襲の全飛来機まで製作予定）、今回もそれをBOXの空間に飛来させました。



③ 作品タイトル「1945H」について

今年、広島に1か月ほど出張しておりましたが、広島は各所に「折鶴」がアイコンとして存在。「平和」と「祈り」の象徴なのだろうか。故にタイトルは「1945」に「H」をつけました。また、下部はせんべいのスチール缶の蓋にマグネットシートを貼り、使用済みのホチキス針をエッチング腐食処理、広島の爆心地の地形に配置して、三角ゼムクリップで折鶴も飛ばしました。



私が影響を受けた彫刻家と音楽家

二科会会員
日本建築美術工芸協会会員
日本ルーマニア文化交流協会会員
日本鋳造家協会会員
池田嘉文



幼少の頃、私の頭に浮かぶ不思議な光景がありました。それは、真っ黒な巨人の群像が、雨に打たれ、1体1体が銀色に輝き動いているように見えた記憶です。その不思議な光景の記憶とは上野西洋美術館にあるロダンの地獄の門で、私が1歳から2歳に見た記憶と両親から聞きました。

粘土で遊ぶ幼少時代に自然と人物の群像を作り今日に至って来ました。幼少の頃の粘土細工での群像制作がスタートであり、ロダンのとの出会いが彫刻家に進むきっかけになったと思います。

そして…漠然としていた粘土制作にインスピレーションとエネルギー、テーマを与えて下さったのが、イギリスのロックバンドでイエスというバンドです。(1968年から活動)

ビートルズ解散の1970年以降数々のロックバンドが現れ、私も70～80年代始めの学生時代にたくさんの洋楽を聞きました。そのひとつがイエスというバンドです。イエスは1985年音楽の祭典グラミー賞を受賞しました。イエスの創立者でボーカル、作詞と作曲を担当するジョンアンダーソンさん(78)との出会いは私の人生、方向を変える大きな出会いでした。そしてジョンさんの音楽は私にエネルギーとインスピレーション、作るテーマを与え創作活動へと導いてくれました。

イエス(ジョンさん)が1972年発表の危機と言う曲を聞いた時に私の心に革命が起きたのを覚えています。

危機の詞の内容は自分を見つける、自己理解の瀬戸際を歌った曲でこの曲を聞き、「制作することで自分を見つけられる。」のではないかと…と、日々漠然としていた私は思いました。

1980年代半ば、私はジョンアンダーソンさんに、「貴方の詞をテーマに日本で彫刻を作ってます。」という手紙をアメリカの各コンサート会場に送った際、ジョンさんがその手紙を見て下さり日本来日公演の時に直接電話を頂き、初めて会う事ができました。1990年から今日まで交流が続いています。

私の個展のために曲を作ってロサンゼルスから送ってくれたり、一緒にショーをやる話、ジョンさんの自宅、スタジオ、教会に4点私の作品をコレクションして頂き感謝以外ありません。

今年のBOX展の作品

マドリガルもイエス、ジョンさんの曲で、曲からのテーマの作品です。(マドリガルは14世紀にイタリアで流行したのどかな牧歌的の歌謡曲で6人の女性が表情豊かに踊る姿を表しました。)

ブロンズのアウエイクンはジョンアンダーソンの自宅暖炉に飾られています。

この数年は体調を崩す事が多く自分を見失いがちですが、危機の曲のテーマ、自分を見つける事を改めて、考えて、「制作を生きる明かし。」として大切にして進みたいと思います。



海洋地形学の物語 (2016)
CASA F 南幸マンション エントランス



地獄の門 オーギュスト ロダン作
(1880～1890年頃)
上野西洋美術館



HORIZON/ ホライゾン (2013)
鴻巣ギャラリー カフェ ストック
庭園美術館



AwAken (目覚め) (2020)
2023年 BOX展
(ジョンアンダーソン氏 コレクション)



ジョンアンダーソン氏と私
2006年 ソロで来日の時 東京で



追憶 (1993)
駒澤大学 百周年記念 講道館



マドリガル (2023)
2023年 BOX展 佳作受賞

モンゴルとの文化交流イベントに参加して！

染色造形家・日本美術家連盟会員
日展会友・現代工芸美術家協会本会員
日本建築美術工芸協会会員
山崎和子



私は、第一回国際芸術シンポジウムに参加のため、モンゴルのウランバートルに出かけてきました。5月15日、参加者40名と共に成田空港から5時間半のフライトの後、チンギスハン国際空港に到着、空港からウランバートルへ向かいました。

2日目は、ホテルからバスで渋滞のウランバートル市内を抜け出し、モンゴルの広大な景色を眺めながら国立公園テレルジヘ向かいました。そこには大きくそびえ立つ亀石やナボ(石で積み上げられたモニュメント)では、小石を積みナボの周りを3回回ると寺院にお参りしたことになりました。一番の楽しみにしていた乗馬は、雪が降る中で乗ることができとても楽しかったのですが、ラクダは時間がなくて乗ることができず残念でした。遊牧民のゲルに訪問した時には雪も止んで抜けるような青空で、雄大な大地が印象に残りました。そして、ジンギスハン騎馬像のテーマパークを見学し、モンゴルの伝統的な衣装にもトライすることができ、モンゴルを満喫できた一日となりました。



亀石



ゲルと景色



モンゴル衣装

3日目は、日本人墓地(ソ連の捕虜となりモンゴルに抑留中他界され方)をお参りして、次に訪れたガンダン寺(モンゴル仏教の総本山)では大仏や観音堂などがあり、大きなお寺の中は大勢の信者さんがお参りに来ていてすごかったです。

そして、今回の訪問の目的であるモンゴル国立近代美術館で開催された「第一回国際芸術シンポジウムアートポスター展」に行きました。今回の第一回国際芸術シンポジウムは、国際総合芸術交流協会主催、在モンゴル日本大使館後援で開催された「文化芸術による子供育成について」「日本の色彩について」をテーマとしたモンゴルと日本との文化交流事業で、モンゴル国立近代美術館には、日本からの参加アーティストの作品をポスターにした約100点が展示され、多くのモンゴルの方が訪れていました。

今回の訪問では、モンゴルの二つの学校との文化交流が企画され、4日目は、新モンゴル学園を訪れました。新モンゴル学園では、私たち参加者のアートポスターが展示されている講堂で、生徒たちの歓迎

の挨拶を受けた後、迫力のある素晴らしいダンスが披露されました。生徒たちとの交流はとても新鮮で、作品に興味を持って質問をしてくれたり、日本語を話せる子がいたりして楽しい交流の一日となりました。

5日目は、2校目の新モンゴル日馬富士学園を訪れましたが、学園ではまず生徒さんの礼儀正しさに驚きました。生徒たちとの交流会では、私の作品にズーと興味を持ってくれた生徒さんが将来美術大学に行きたいと語ってくれたのでとても嬉しかったです。学園の食堂で昼食をいただき、こちらの学校でも生徒たちの伝統的なダンス、コーラス、楽器演奏と素敵な歓迎をしていただきました。夜はモンゴル大統領官邸の迎賓館で晩餐会がありました。モンゴル国大統領教育顧問ロドエラブサル様、駐モンゴル日本国特命全権大使の小林弘之様らのご出席をいただいた晩餐会では、思い出に残る夕べとなりました。さらに私は、モンゴル国立近代美術館からのアートポスター収蔵証明書、新モンゴル学園「芸術親善大使」任命証と共に第一回国際芸術シンポジウム「ウサンビンデリヤー賞」をいただきました。(ウサンビンデリヤーとは、宝石のアクアマリンにことです)これは「未来への平和につながる国際親善と教育現場にて芸術を通し学生の感性の育成に多大な貢献をされたことを表彰いたします」という賞で、今回の私たちの訪問は、モンゴルとの文化交流・親善の役割を少しでも果たすことができたのではないかと思います。あつという間の6日間でしたが、新しい、そして貴重な経験ができた、とても楽しい旅となりました。



新モンゴル日馬富士学園



山崎の作品ポスター



アートポスター展の会場



生徒との交流ワークショップ



新モンゴル学園生徒のダンス



新モンゴル日馬富士学園生徒のダンス

展覧会活動報告

■ 深尾雅子 Textile Art Exhibition — 再考・最高・再構 —

会場：いりや画廊

会期：2月20日～25日

(前号で深尾雅子様作品介绍の際、誤って他の方の作品写真を掲載してしまいました。
深尾雅子様、関係の皆様にご迷惑をおかけしたこと深くお詫び申し上げます。)

「今ここで立ち止まり再考し 新たに最高のものを
求めて 次へと再構する」



《白蓮華曼荼羅 2021》



《氷河 2022》

■ 第67回新世紀展

会場：東京都美術館

会期：5月12日～18日

犬飼三千子会員が招待作家として出品されました。

《往にし方(1)》(上)

《往にし方(2)》(下)、



■ 熊木真由美 染展

会場：ギャラリー 江
会期：6月22日～29日

染織家熊木真由美会員による藍染めTシャツ、スカート、パンツ、傘、コットンチマフラー、シフォンスカーフ、バッグなど多くの染作品が展示されました。



■ 第4回フローラル展

会場：GALLERY UNICORN
会期：5月25日～30日

上江洲牧子会員がガラスの「箱庭考察」を出品されました。2019年ギャラリーの企画で始まったフローラル展は女性作家だけの展覧会です。4回目を迎えメンバーも5人から10人へと増え、日本画・彫刻・テンペラ画などジャンルや年齢も様々な作家が集い開催されました。



■ 75回記念 三軌展

会場：国立新美術館
会期：5月17日～29日

工芸作家御正牧子会員が出品されました。



《天使たち》漆喰フレスコ
天使たちが、野山を、自然の中を軽やかに舞っている様子を表現しました。

■ ぼんたなりト展

会場：B-gallery

会期：7月18日～30日

自由な表現を求め、アトリエカフェ「ぼんたな」に集う彫刻家、画家、皮革工芸家などのメンバー6名に、招待作家2名を加えた第1回グループ展が開催されました。(山崎輝子会員、渡邊雅子会員)



■ テキスタイルアートミニアチュール東京展

会場：Gallery 5610

会期：7月21日～29日

繊維素材を中心に「染める」「織る」「編む」「組む」「縫う」などの技法をベースに創作表現を行うテキスタイル・ミニアチュール展では、現在活躍中のアーティスト100名が20cm×20cm×20cmという限られた空間に、従来のスタイルを超えた空間が表現され、五十嵐通代会員、岡本直枝会員、中野恵美子会員、小泉伸子会員が出品されました。



岡本直枝 《歩歩XIII cui》



中野恵美子 《ツインタワー》



小泉伸子 《スパイラル》



五十嵐通代 《抱く》

法人会員の企業活動紹介

● emo 株式会社

エモ株式会社取締役
日本建築美術工芸協会法人会員
清瀬光広

emo 株式会社は、空間デザイン提案や設計、家具や特注什器の提案と制作を行う会社です。

当社は、2020年にフィールド・クラブ株式会社の関連会社として設立されました。フィールド・クラブ株式会社は、1998年から北海道で屋外広告・サイン・造形物を通じてものづくり業界への参入を始め、2009年には東京、2012年には大阪工場を開設し、自社の全国ネットワークを活かして、商業店舗、公共施設、看板、造形物などにおいて、企画、設計デザイン、製作、施工、管理をトータルに行う制作会社に成長しました。

当社は、フィールド・クラブ株式会社のFFE事業部を引き継ぎ、2020年11月に設立されました。当社の思いは、「ええもん」を考えて作り、世の中の人に笑顔、感動、そして感謝を生み出すことです。固定観念にとらわれず、新しい技術を取り入れ、失敗を恐れず、面白い発想や妄想、発見を探求し、「ええもん」という有形無形のものを生み出しています。

我々はまだまだ駆け出したばかりの会社ですが、空間提案、ものづくりの提案を基軸にこれからの未来に少しでも貢献できるよう携わっていく所存です。空間に対する新しい提案を通じて、「創造とものづくり」をお客様の期待に応えることを目標に、努力を重ねてまいります。今後とも、日本建築美術工芸協会の皆様には、格別のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

会社名 emo株式会社(エモ株式会社)
設立 2020年11月
代表取締役 辰巳正彰
本社 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル6F
emo STUDIO 大阪府堺市西区菱木2丁2380-1
事業内容 各種空間のデザイン提案/設計、特注什器や家具の提案と制作、ホテル等のFFE制作など



● 株式会社六花亭

六花亭アートヴィレッジ
「中札内美術村」「六花の森」館長
日本建築美術工芸協会法人会員
飯田郷介

六花亭アートヴィレッジ「中札内美術村」では、日比谷公園とほぼ同じ広さの柏林の中に7館の美術館が展開し、5人の作家による様々な北海道の四季をお楽しみいただけます。「六花の森」では、北海道の自然を10年の歳月をかけて再生した敷地いっぱいに六花亭包装紙に描かれた山野草が咲き広がり、その中に点在する7館の美術館では北海道の風景、山野草を描き続けた坂本直行の作品が展開しており、日高山脈の水彩画やデッサンと共に、坂本直行が牧野富太郎の図鑑を携えて描いた山野草のスケッチなどをお楽しみいただけます。

「中札内美術村」では、毎年「二十歳の輪郭」という全国公募展を開催しています。この公募展には、その年に二十歳になる方だけが応募できる自画像展ですが毎年多くのご応募をいただき、今年は231点ものご応募をいただき、全応募作品が「中札内美術村」の北の大地美術館で開館期間中展示されます。

六花亭では、もう一つ「六花ファイル」という全国公募展を開催し、今年第9期(隔年開催)を迎えました。これは「一人一箱。箱に収まるアートです。」という、縦36.5cm、横29.5cm、高さ8cmの箱に入る作品の公募展で、箱に入るサイズであれば絵画、彫刻などジャンルは問いません。今まで日本建築美術工芸協会の会員の方々が入賞されましたが、今年は鈴木法明会員、金原京子会員、中村ノリコ会員、山崎和子会員(五十音順)の4人が入賞されました。

六花亭では、札幌市南区真駒内に「六花文庫」という図書館を開館しており、食にまつわる約8,000冊の書籍を無料公開していますが、この「六花文庫」の暖炉のあるコーナーに「六花ファイル」の入賞作品が2年間展示されています。札幌へお出かけの際は是非お立ちよりください。



《出会う》鈴木法明



《PET ボトルの森》金原京子



《雷雲の目》中村ノリコ



《Sometime - A》山崎和子

YKK AP 〈Part 2〉

広報委員会

「黒部から世界へ」

富山県黒部市にある YKK 黒部事業所は、YKK グループの「技術の総本山」であり、YKK グループの開発・製造機能が集約しています。ファスニング事業の黒部工場、古御堂工場、牧野工場及び AP（建材）事業の黒部・黒部越湖・黒部萩生の3製造所に加え、YKK・YKKAP の R&D センターもあり、約 6,600 名の人々が働いています。

今回訪問しました YKK 黒部事業所の敷地内には、YKK50 ビルや見学者のために YKK グループの歴史や技術を紹介した丸屋根展示館 1 号館、2 号館などが設けられています。かまぼこ屋根の工場を再生した丸屋根展示館 1 号館に入ると、まず大スクリーンで黒部市内に展開する工場・製造所が紹介され、「ファスナーづくり」、「窓づくり」の展示に続き、次の「YKK タウン」のコーナーでは、宇宙服から始まり、私たちのまちとくらしのあらゆるところに使われている YKK 製品に驚かされます。「創業者吉田忠雄ホール」では、「善の巡環」という吉田忠雄の経営哲学の展開と

共に、企業の根幹をしっかりと構築して、世界的な大企業に発展させた吉田忠雄の生涯に感銘を受けます。丸屋根展示館 2 号館では、「ファスナー・窓の技術史」が紹介され、歴代のファスナーや押し金型などと共に「モード学園スパイラルタワーズ」のカーテンウォールなどが展示されています。そして併設されたカフェでは、桜も植えられたセンターパークを眺めながら、ブラジルにある YKK のコーヒー農園から届けられたコーヒーを味わうことができます。

従業員を大切にし、社会や地域との関りを尊重する YKK グループでは、黒部のまちづくりにも貢献しており、「パッシブタウン」は、全街区が完成すると、約 250 戸の一般の人も入居可能な集合住宅となります。この「パッシブタウン」は、エネルギー消費量が北陸の一般の住宅に比べ、5割から6割削減できる、自然エネルギーの活用などによるエネルギー負荷の少ないパッシブデザイン建築の実証のために建設されました。第1街区の設計は小玉祐一郎、第2街区は楨文彦、第3街区は森みわが設計を担当し、第4街区



YKK センターパーク



丸屋根展示館 1 号館 (AP 展示)



YKK50 ビル



丸屋根展示館 2 号館 (窓) (写真提供: YKK AP)

の保育園（田口知子設計）と第5街区（ヘルマン・カウフマン設計）では、本格的な木造建築に挑戦され、やがて木製窓が普及するかもしれません。また、黒部駅周辺の活性化を図るため、単身寮「K-TOWN」（大野秀敏設計）では、タウンハウス 25 棟を建設し、一般の人も利用できる小売店や集会場などが入った「K-HALL」（大野秀敏設計）も併設され、黒部寮（ヘルマン・ヘルツベルハー設計）などと共に黒部のまちづくりに貢献しています。

「善の巡環」から、サステナブルな未来へ

YKK グループでは、「企業活動のすべての根幹にあるのが、YKK 創業者吉田忠雄の企業精神『善の巡環』です。『他人の利益を図らずして自らの繁栄はない』という思想は、社会や顧客・関連業界、そして社員と共に栄え続けようとする YKK の企業精神を鮮明に表しており、『サステナビリティ』と非常に親和性の高いものと捉えています。吉田忠雄は、この企業精神の本質を、さまざまな言葉によって繰り返し社員に伝えてきました。『善の巡環』につなげる『事業とは橋を架けるようなもの』と説いた言葉は、社会全体の利益を図らない限り、自らの繁栄もないというサステナ

ビリティ全体の考え方に通じます。『清らかな湧き水のごときものづくり』、『工夫で活かせばゴミも立派な資源に』という言葉は環境配慮につながり、『大樹より森林の強さを』という言葉は、人権と個性の尊重につながります」（『YKK 株式会社統合報告書 2021』より）という創業者の時代からサステナビリティと親和性の高い思想を経営の根幹として、環境負荷の低減をはかり、持続可能な社会の実現に貢献する商品と技術の開発に取り組むなど、サステナブルな未来を見据えた姿勢を明確にされています。

（文責：飯田郷介）

参考文献：

- 『獅子が吼える YKK 創始者吉田忠雄の生涯』 木村勝美著
リヨン社 1995 年 3 月
- 『YKK の流儀 世界のトップランナーであり続けるために』
吉田忠裕著 PHP 研究所 2017 年 9 月 1 日
- 『創業 30 年 YKKAP その歩みと将来ビジョン』 創樹社
2020 年 12 月 24 日発行
- 『みんなに伝えたい 世界のファスナー王吉田忠雄のこぼれ』
千広企画 2020 年 5 月 6 日発行



バッシブタウン 1 期～3 期街区全景（写真提供：YKK AP）



バッシブタウン第 2 街区（撮影：飯田郷介）



バッシブタウン第 1 街区（撮影：飯田郷介）



K-TOWN（撮影：飯田郷介）

イサム・ノグチ念願の夢の 「野外美術館・モエレ沼公園」

日本建築美術工芸協会法人会員
飯田郷介

モエレ沼公園は、札幌市の北東約八キロに位置し、蛇行した豊平川の一部が三日月湖として残された沼地に囲まれた約百ヘクタール、周囲を囲むモエレ沼の水面も合わせると百八十九ヘクタールというスケールの大きな公園である。「モエレ」とは、アイヌ語で静かな水面・ゆったり流れるという意味の「モイレベツ」に由来する。モエレ沼公園は、「公園を一つの彫刻」とする彫刻家イサム・ノグチのダイナミックな構想によって造成された、イサム・ノグチの最後にして最大規模のランドスケープ彫刻でもある。

モエレ沼公園建設プロジェクトは、一九七〇年代に札幌の市街地を公園や緑地の帯で包み込もうという「環状グリーンベルト構想」の拠点公園として計画されたことに始まる。当時、札幌市は増大し続けるごみ問題への対応が求められており、特に不燃ごみを計画的に埋立て処理するための用地が必要であった。しかし、迷惑施設である埋立てには地元の反対があり、選定は困難を極めていた。こうした中で出てきたのが、モエレ沼に囲まれた平坦な低地帯が処分されるという話だった。牧草地として利用されていた標高四メートル、約百ヘクタールのこの場所を札幌市は早速ごみ処理場の候補地とした。この一帯は洪水危険地帯であったため、いざという時には雨水の調整池として機能させることもでき、好都合であった。一方で、札幌市は、「静かに流れる広い川」に囲まれたこの地の水辺景観を活かして市民のレクリエーションの場にするという構想を立てた。そして札幌市は、この土地にまず地形造成のために、ごみを埋立て、最終的に公園として整備、水害時の治水対策機能も持たせるという提案を行い、地元からの了解を得ることができた。清掃事業と公園事業、治水事業の協力によって、新しい公園をつくらうとしたのである。

ごみの搬入と埋立ては一九七九年に開始され、一九八二年には、モエレ沼の川部分も含めた百八十九ヘクタールを総合公園とする計画が決定した。そして埋立てが完了したブロックから順次造成を進め、公園の外周道路工事や〈サクラの森〉の植林が始められた。不燃ごみや焼却残渣などの搬入と埋立ては一九九〇年まで結局十一年間続き、約二百七十万トンが処理されたという。イサム・ノグチがこの地を訪れたのは、一九八八年三月三十日、埋立てが始まってからすでに九年が経ち、満杯になるまでに二年ほどを残した時期のことであった。

モエレ沼公園建設の設計監理統括者となる川村純一は、丹下健三・都市・建築設計研究所で初代の草月会館（港区赤坂一九五八年、一九七七年に現在の建物に建て替えられた）の設計に参加した際、草月会館のエントランスホールの石と水

による展示空間《天国》を手掛けたイサム・ノグチに初めて出会った。以後草月会館竣工後も香川県高松市牟礼町の「イサム家」を訪ねて親交を深め、一九八四年、ニューヨークにイサム自らの手で開館した、イサム・ノグチ・ガーデン・ミュージアム（現・ノグチミュージアム）のオープニングにも招待された。この川村純一が立ちあげた建築設計事務所「アーキテクトファイブ」が本社ビルの設計を手掛けた札幌市のコンピュータソフト会社BUGの服部裕之社長も川村純一を通じてイサムに傾倒していった一人であった。そして服部は、川村とニューヨークを訪れ、イサムにイサム・ノグチ・ガーデン・ミュージアムを案内され、大規模な公園の計画〈プレイマウンテン〉などのブロンズ模型の説明を受けた。この〈プレイマウンテン〉は、一九三三年、イサムが二十九歳の時に、大地そのものを彫刻として地球を彫り込むという閃きを得て制作した作品で、彫刻を大地に関連づけるイサムのアイデアの核となった作品であり、彫刻的風景としての遊園地の原型でもあった。しかし、ニューヨーク市に何度も遊園地の提案を行ったが、目の目をみなかった計画であった。日本にこれらの遊具や公園を遺したいというイサムの思いを知った服部は、ニューヨークから帰国すると、早速行動を起こした。当時の札幌市役所の桂信雄助役に話をもちかけたところ、札幌市としても積極的に受け入れたいとの意向を受け、川村を通してイサムに候補地の提案が行われた。

そして、一九八八年三月二十九日、イサムは、初めて札幌を訪れた。翌日、まず案内された候補地、芸術の森美術館を訪れたイサムは、「ここはもうきちんとできていますから、僕がすることはないです」^{*1}と興味をしめさず、次に案内された市立高等専門学校の前地には見向きもせず、最後の候補地であるモエレ沼に向かった。イサムを迎えたモエレ沼には、盛んにごみを運ぶトラックが出入りし、強風にビニールごみが舞い、雪もまだたくさん残っていた。しかしイサムは長靴に履き替えると、モエレの残雪の中を歩きだした。そして「空がすごく広い。ここにはフォルムが必要です。これは僕のやるべき仕事です」^{*1}と語り、イサムの夢の公園を実現する第一歩が踏み出されたのである。

札幌市からの資料と条件をニューヨークに持ち帰ったイサムから正式にモエレ沼設計受託の返事が届いた。そして、第一段階のマスタープランをまとめたイサムは、一か月後に札幌を訪れ、二回目の訪問となる五月二十日、札幌市へのプレゼンテーションを行った。しかし、公園全体を一つの彫刻として考え、幹となる園路と広場を独特の自然で幾何学的な線によって構成

し、水と緑と山といくつかの施設などを微妙な相互関係とレベル差をもって配置したプランは、従来の公園のイメージとあまりにかけ離れており、イサムのは、中々理解されなかった。一九八八年当時、札幌市「環状グリーンベルト構想」の公園の一つとしての位置づけから計画ができあがっていたモエレ沼では、すでに外周の道路工事や〈サクラの森〉の植林が始められていた。この時点での計画では、全体をいくつかのゾーンに分け、それぞれ運動広場、彫刻広場、芝生広場、多目的広場といった一般的な分類に従った配置になっていたが、イサムは、「せっかく広い大地とそれを取り囲む水辺があるのに、それではこの特徴が活かされていません。自分がどこに立っているのかもわかりにくい。まず全体を把握できるマスタープランを作らないと駄目です」^{*1} また、小川をつくる計画があることを説明されると「自然の中で自然の真似をしても負けますよ」^{*1} と語り、この公園の設計を受ける条件として、計画を白紙からやり直すことを主張した。

この年、イサムは、パリ、ローマ、ピエトラサンタ、アテネ、デルファイ、パロス、ニューヨークと巡りながら、モエレ沼の現地を計四回訪れている。六月十九日、第三回目となる札幌訪問では、札幌市に対して、前回よりも詳しい縮尺二千分の一の模型を使い、具体的なイメージと前回からの変更点が説明され、記者会見と新聞発表が行われた。そして、十月二十八日の第四回目の札幌訪問では、当時の板垣市長との会見が行われた。この時の案では、道路や広場、噴水やモニュメント、プール、水の流れ、中核施設となる〈ガラスのピラミッド〉などの要素がイサムから説明された。それぞれの要素は、イサムがかつて別の場所で提案した計画もあれば、実現させたものもあった。そして、毎年十一月十七日に香川県高松市牟礼町のアトリエで行われていたイサムの誕生日の日にも、マスタープランの模型に手が加えられ、パーティーが始まる前によく完成した。



プレイマウンテン

そしてイサムは、一通りの説明を終えて、「これで僕がいなくてもできますね」^{*1} と冗談めかして語ったそうであるが、そのわずか一ヵ月半後の十二月三十日にイサムは旅立ってしまった。そして、翌一九八九年一月七日、昭和天皇が崩御され、年号が平成となった。

イサムの死により、誰しもモエレ沼公園プロジェクトの行く末を案じたが、札幌市は、イサムのマスタープランに基づいて公園づくりを続行すると決断した。大英断であった。しかしイサムが残したものは、三千分の一の平面図と二千分の一の模型と数枚の全体図面だけであり、苦難に満ちた、そして長きに亘るプロジェクトの始まりでもあった。この残された模型・図面を基にプロジェクトの実施設計を進める体制として、監修は建築家で、イサム・ノグチ財団のショージ・サダオ、設計統括はアーキテクトファイブ、設計監理統括者は川村純一、ランドスケープはキタバ・ランドスケープの斉藤浩二と決まった。主として大きな施設や建築物はアーキテクトファイブが、広場や緑地は、キタバ・ランドスケープの斉藤浩二が担当することになった。斉藤浩二は、イサム・ノグチに強い憧れを持ち続け、イサムのことに詳しいことから、また札幌の風土を理解し、公共的な造園設計の経験があることからプロジェクトへの参加が決まった。そして斉藤は、イサムが描いた計画図を基にモエレ沼公園の全体計画図制作にとりかかった。それはイサムが描いた計画図の線をトレースして、樹木や芝生の表現を加えて造園的な図面をつくる仕事であった。

アーキテクトファイブは、まず〈サクラの森〉の七つの遊具広場の設計にとりかかった。遊具はすべてイサムが生前にデザインしたものであるが、実際にアメリカや日本の公園に置かれているものもあれば、簡単なスケッチや模型だけのものもあった。遊具は実物大の模型をつくり、デザイン、安全性などを一つ一つ確かめるという地道な作業を続け、このゾーンの完成ま



モエレ山

で三年以上もかかっている。

次に〈プレイマウンテン〉の設計に取り掛かった。〈プレイマウンテン〉は、「これはある特定の市有地において、遊べる面積を拡げるための独創的な考えであった。そのために表面を傾斜させて様々な大きさの階段をつけたピラミッドの形をつくったが、これは屋根でもあり、この内部も利用できるようにした。渦巻の形をした屋根は、冬はその滑走路となる。もう一つのより急な斜面は、水が流れ落ちて浅いプールにそそいでいる。〈遊び山〉の一方の側に沿って水泳プールがあり、他方の側には野外音楽堂がある。音楽は水の向こうの段々に腰掛けている人たちに聞こえる。これは1934年ニューヨークの公園委員ロバート・モーゼスに提出したが、あまり熱心な興味を示してくれなかった」^{*2}とイサムが語るように、子どもたちの遊びを喚起する場として階段やスロープが提案され、渦巻き状のスロープと、スロープに囲まれた部分には、プールが計画されていた。夏はプールに水が注ぎ、冬は渦巻き状のスロープでソリを滑走させて楽しめるようになっていた。また階段状の部分は客席にもなり、その前には野外劇場も計画され、南西側の階段に坐ると、〈ミュージックシェル〉はステージとなっていた。三千分の一の平面図と二千分の一の模型しか残されていない中、川村が一から設計をしなければならなかった。そして、五百分の一の模型をつくり検討を重ねていった。南西側の石段は、当時香川県高松市牟礼町の庵治石（御影石）を使用するという提案に対して札幌市からなぜ四国の石を指定するのか、地元にも良い石があると反対されたこともあったそうであるが、北海道内の御影石では硬さが足りないということで瀬戸内海の犬島から御影石を採掘し使用された。その後の石工事は北海道産の石材を多く使用することになったという。

公園の西口近くにある〈テトラマウンド〉は、正三角形のまん中に半円形の緑の山があり、その上空で斜めに立てられた三本のステンレスパイプが三角錐を構成するモニュメントであるが、模型では、細い棒でつくられた一辺一・五センチメー

ルの三角錐であった。原寸では、直径二メートル、長さ二十九メートル、高さは十三メートルと四階建てのビルに匹敵するような大きさであるが、モエレ沼公園のスケールには落ち着いている。生前、イサムは、「私は小人になって、この模型の中を歩き、鳥になって空から眺めるのだよ」^{*1}と語っていたそうであるが、イサムは、自らを二千分の一の模型の中にも置くことができ、また現実の一分の一で考えることもでき、どんなスケールであっても、実際の空間を捉える感覚が優れた人であった。

〈ガラスのピラミッド〉は、〈モエレ山〉、〈プレイマウンテン〉と共に、モエレ沼公園の重要なエレメントであるが、イサムが書き遺したモエレ沼公園のマスタープランに書かれた五センチメートルほどの平面図と断面図からの設計スタートであった。

イサムは、最後となった一九八八年十月三十日の札幌訪問の際、アーキテクトファイブの事務所で全体模型をつくっていた時、「札幌にはビーチがないから」^{*1}と青い紙に丸い形を描いて、それをハサミで切って模型の上に置き「ビーチ」と呼んだ。そのたった一枚の、でこぼこの円のような形の紙片から〈モエレビーチ〉が生まれた。ビーチの形は再現され、中央部で噴き出した水の波紋が水際で吸い込まれて消えていく、その水が消えていく波うち際の濾過の対処について試行錯誤が繰り返された。そして、密で水が透りにくい砂ではなく化石珊瑚の粒を樹脂で固めて、ビーチの表面の仕上げや周辺も含めてすべて珊瑚で舗装された。ビーチをアスファルトや砂にしていたら、夏は熱くて裸足で歩くことができなかったが、多孔質の珊瑚は熱くならないので裸足で歩くことができるという効果ももたらせた。

イサムの三度目の札幌訪問で問題になったのは、公園の中心部に高圧線が横断していることであった。札幌市では、この高圧線を公園内の敷地内での移設を検討していたが、イサムは、移設できなければこのプロジェクトから手を引くと、モエレ沼の外側への移設を強く要望した。イサムの強硬な要望を受け、当時の緑化推進部環状緑地係の山本係長は上司を説得し、管理者である国を説得し、高圧線が通ることになる土地の地主に掛け



合い、北海道電力の協力を得て、ようやくモエレ沼の外への移設が可能となった。山本係長からこの報告を受けたイサムは、「私のためではないでしょう」「あなた方札幌のためでしょう」^{※1}と語ったというが、山本係長は、「その時に自分の作品のためにということでは言っているんだという先生の気持ちがよく伝わってきました。最初から最善の努力をしていなかったと反省させられました」^{※1}と語っているが、将来のためにもっと理想を追うべきで、簡単に妥協してはいけないことを学んだそうである。

設計は困難をきわめたが、工事も多難の連続であった。〈アクアプラザ〉は、石を貼った広場と延長百五十メートルのカナール（水路）の造形であるが、イサムのプランにはカナールのユニークな曲線は描かれていたが、他には水が川のように流れて夏には遊び場になるといった程度のことしか遺されていなかった。そこでイサムの作品の中からイメージの拠り所をさがし求め、アメリカコスタメッサにある〈カリフォルニア・シナリオ〉をイメージしながら設計が始められた。イサムの急逝から十年目の一九九八年七月五日、〈アクアプラザ〉の完成を待って第一次オープンのセレモニーが行われた。この時点で〈モエレビーチ〉、〈プレイマウンテン〉、〈テトラマウンド〉、〈アクアプラザ〉など、まだ全体の七割しか完成しておらず、〈モエレ山〉は造成中で、〈ガラスのピラミッド〉、〈海の噴水〉はまだ完成の目処が立っていなかった。〈モエレ山〉は、札幌市の工事残土を積み上げて、人工的に造られた山で五十メートルの高さがある。建設残土を積み上げていく計画であったが、バブル経済がはじけて景気が落ち込んだため、建設工事が激減して残土がなくなってしまったのである。そのため予定されていた一九九六年から大幅に遅れて、実現は二〇〇四年になってしまった。山の表面を覆う約八万平方メートルの張芝は、三年かけて育てて張られたものである。

〈海の噴水〉は、最後に完成したモニュメントである。イサムがモエレ沼を視察した後に描いた最初の図面の中央に丸い

形が描かれ、さらにその中心に小さな丸が加えられた。これが〈海の噴水〉である。イサムは、当初からマイアミの〈ベイフロントパーク〉の巨大な噴水〈海の噴水〉をイメージしていた。中央噴水という当初の名もマイアミの噴水にちなんで〈海の噴水〉となった。（海の噴水は現在故障中のため、P.22の写真は2013年7月に撮影したもの）

イサム・ノグチが、ごみを運ぶトラックが盛んに出入りするモエレ沼の地に足を踏み入れてから十七年たった二〇〇五年七月一日、モエレ沼公園グランドオープンの記念式典が開催された。計画そして工事に関わった人々の感慨は深いものであったと想像する。午後五時半から〈ガラスのピラミッド〉で開かれた記念式典では、日暮れを待って〈海の噴水〉の通水式が行われた後、初めてライトアップされた噴水のプログラムが公開され、集まった二千人を超える参加者から歓声があがったという。

〈ガラスのピラミッド〉のアプローチの石の壁面には、モエレ沼公園の完成のために様々な力を尽くした関係者の名前が記され、そこには「モエレ沼公園 イサム・ノグチの最後のプロジェクトは、彼の最も野心的で重要なランドスケープデザインである。彼は一九八八年十二月の彼の死の前にマスタープランを終えた。公園は一七年後の二〇〇五年に完成した。この記念碑的なプロジェクトは、イサム・ノグチの創造的な才能にふさわしい記念である」と記されている。

※1 「イサム・ノグチとモエレ沼公園」川村純一・斉藤浩二著
学芸出版社二〇一三年十月

※2 「イサム・ノグチ ある彫刻家の世界」イサム・ノグチ著
美術出版社一九六九年一月



(写真撮影：飯田郷介)

追悼展『坂上直哉の足跡をたどる』Part1 坂上直哉を偲ぶ会

世話人代表
露口典子

本年4月、長年 aaca に貢献されてきた坂上直哉氏の追悼展と偲ぶ会が開かれました。氏は東京藝術大学を卒業後、「建築空間にステンレスで絵を描きたい」と鉄鋼会社の門をたたいてから50余年、建築とともに豊かな空間を創造するアートを目指してきた異色のアーティストでした。それ故に、また aaca の現役理事だったことから、会場を建築会館といたしました。

追悼展は春と秋の2回に分けて開催。春の追悼展 Part1 会期中（4.23～4.28）には偲ぶ会も催しましたので、この度は Part1 と偲ぶ会についてご報告いたします。

Part1 は『ステンレスで絵を描きたい』をテーマに、氏がどのように人とステンレスのインターフェンスを考え、表現してきたかを主に紹介いたしました。代表作・四天王寺『映し曼陀羅』の部分再現、大型作品『白道』、薄くて透明なステンレスの花びらなどの他、氏の学生時代の銅版画や病床で描かれたデッサンなどを展示。東京新聞に告知掲載されたこともあり、これまでほとんど知られていなかった氏の業績を多くの方々（会期中来場者約300名）にご覧いただけたことは、関係者一同大きな喜びでした。



追悼展 Part1



坂上氏を偲ぶコーナー



「風も通す光も透す」
ステンレスの花びら

偲ぶ会は、建築会館中庭にステージと大型スクリーンを設え、生前お付き合いをいただいた方々約150名をお迎えいたしました。生前から「ARTから芸能へ」（会報誌 No.31）の大切さを繰り返し説いていた氏を偲ぶには、芸能の要素をできるだけ取り入れた会にしようと計画。お客様のお迎えには、病床で聞いていたという美空ひばり、吉幾三、ユーミンの曲を、黙祷は大好きだったチェンバロの音色で、そして、一番の目玉として大道芸・江戸糸あやつり人形を氏の長年の友人に演じていただきました。獅子舞の獅子の口にそっとうご祝儀を唾えさせる粋な計らいのハプニングもあり、最後の三本締めまで、終始賑やかに、かつ和やかに故人を偲ぶひとときとなりました。

【式次第】 司会：北川昭一氏 演奏：安倍尚樹氏

黙祷（チェンバロ：大村千秋氏）
坂上氏を偲んで（三喜俊典氏、小原芳明氏、佐藤一郎氏）
献杯（高梨兵衛門氏、節子氏）
坂上氏を偲ぶスライドショー（関係者紹介）（八咫）
江戸糸あやつり人形（上條充氏）
翼思い出ムービー
締めのご挨拶（東條隆郎氏）
坂上夫人ご挨拶（坂上冷美氏）
世話人紹介
神田三本締め（山口弘一氏、竹内健次郎氏）



偲ぶ会



江戸糸あやつり人形



東條会長ご挨拶



坂上夫人ご挨拶

坂上直哉さんを偲ぶ

情報文化研究委員会委員 奈良在住 大田敏彦

2009年5月4日、aacaの企画で吉野山中をご案内したのが、坂上さんとの初めての出会いでした。夜は私のアトリエで総勢20名近くの大宴会を催しました。それ以来、私が東京出張時には新宿や田町で、坂上さんが来阪時には、奈良や大阪で酒盃を重ねる日々を共有してきました。仕事仲間でないことが、気軽にいろんな話題について談笑できる大事な友人の一人となりました。

坂上さんはいつも関西の文化について羨望されて【関西はいいよな】が口癖でしたが、決して【大阪はいいよな】とは言っ

元情報文化研究委員会委員 京都在住 立松直樹

東京出張の際に坂上さんと一献傾けるひときは楽しみでした。坂上さんはアルコールが入り会話が佳境に入ると、ますます饒舌になって哲学の領域に入っていきます。酒に弱い私は思考力低下で聴きとるのも必死のところ、容赦なくそして気持ちよさそうにお話しされるのでした。

追悼展は、坂上さんの新たな一面を新鮮な目で鑑賞できる機会となりました。とりわけ、ステンレスへの光の干渉現象による発色技術を用いた作品は衝撃的でした。と言うのも、梅

元調査研究委員会委員長 東京在住 七字祐介

2000年奈良大会に関西勤務であった私が代理出席したことが、aacaとのお付き合いの始まりでした。その日奥深い奈良町の居酒屋で翌朝まで飲み明かしたのが昨日のようです。もとより坂上さんとの無頼の出遭いでもありました。まもなく東京転勤した私は、設立15周年記念の江戸博展(2004年)を機に調査研究委員会(調研)に加わることになりました。その後新しい体制のもと、坂上さんと私は理事に加わり“何を識る”“何を目指す”“何より愉快地”を侃々諤々やっただけです。まずは“地方文化を知る”を掲げて京都伊根の舟屋(2005年)、翌年京都美山の茅の里への研修旅行が関西会員の案内で

していませんでした。ご案内した関西の催事に必ず参加してくれたのは、永い関西の歴史を知ることが坂上さん自身を知る作業となっていたと思っています。

2023年4月23日、奈良から車で出向いた追悼展会場では、坂上さんの繋いでくれた知人たちと一緒に、坂上さんの思いの【形】を見ることができました。切り開く創造者の精神の【形】でした。坂上さんがこの上なく愛したステンレスは不朽の人工物です。坂上さんにはステンレスのように永く名前を残してもらいたい。坂上さんとの交流の場となったaacaに感謝します。

田の歓楽街、北新地メイン通りの遊歩道上に、北新地三百年の歴史・文化を訴求する10基のサインを企画・デザインした折に用いたのが、当時ようやく技術として確立されたチタン陽極酸化法によるグラフィック表現だったのです。2003年に完成させたのですが、坂上さんは、なんと20年も遡った1983年にステンレス発色法による初期代表作『四天王寺曼陀羅』を世に出されていたのです。ああ、金属で絵を描きたいという共通の思いで改めて酒を交わしたかったです。

挙行されました。まもなく関西支部設立総会を大阪中ノ島中央公会堂で開催する盛り上がりを見せました。

概念思考を嫌う坂上さんは「草」志向で調研を離れて、情報文化委員会(情文)を立ち上げました。梅・桃・桜が一斉に咲き揃う三春の村落に引き継がれる恬淡とした行事、お人形様の衣替え見学は、福島浜通りを襲った大震災と原発の被災地域と裏腹の感慨深い旅でした。

毎年、松の内を過ぎると情文主催の七福神巡りが楽しみです。本年は3年振りになんと羽田七福神巡りに参加しました。冷えた体に一献の熱燗です、盃の先にニコニコ顔の坂上さんが覗いていましたよ。



羽田空港に設置されていた虹の翼を玉川学園に移設した時の坂上氏(2020.1)



柴又七福神巡り(2018.1)
布袋様のお腹に手を当てているのが坂上氏



作品『翼竜のたまご』製作中の
たまごの中で(2013.3 菊川工業にて)

会員増強委員会だより

第9回 aaca サロン開催報告

美術・工芸とともに建築空間を構築する 再読と継承 東京藝術大学大学美術館

(株)日本設計
執行役員フェロー
博士(学術)
日本建築美術工芸協会法人会員
古賀大



21世紀に入り四半世紀を迎えようとしている今、近代の所産から人間が得た物事は何だったのか、改めて考えることが多いと思います。あらゆる産業で効率性は飛躍的に向上し、多くの物とサービスが行きわたり、建築や都市は再生産を繰り返してきました。しかし、この数年を振り返ると、経済的な低成長を嘆きながらも、その緩やかな歩みの中で、人間本来の感性を大切に時間を取り戻しつつあるようにも見えます。

私が六角鬼丈先生にお会いしたのは、1995年に東京藝術大学大学美術館の設計チームに入った際、完成までの約4年間をご一緒する機会に恵まれました。その空間と光、意匠と素材は鬼丈先生の思想が強く打ち出されたもので、国宝・重要文化財を収蔵する美術館にふさわしい表現として、赤砂岩、アルミ鋳物、銅板、産業用ガラスインゴット、仕上用木材などの多様なマテリアルの他、青磁タイル、漆、螺鈿、乾漆板などの素材と技によりつくられています。

今回お招きした建築家の六角美瑠さんは鬼丈先生の次女であり、現在は神奈川大学教授を務めておられます。大学では鬼丈先生の作品の造形・空間の意味を分析しながら現代デザインを考える授業もされています。第9回 aaca サロンでは、六角美瑠さんの仕事、建築思想をお聞きするとともに、東京藝術大学大学美術館などの作品を手掛かりに建築と美術と工芸の関わりを考える機会になりました。

まず、自己紹介では鬼丈先生の初期作品である自邸「クレバス」で育ったことから始まり、これが建築の原風景になっているとのことでした。父の影響を受けつつも、建築思想、空間への関心として「景と建築」というテーマを見出されたお話を聞きました。

「工芸と建築」は六角家にとってたいへん繋がりの深いものと言ってもいいでしょう。明治から昭和にかけて活躍された漆芸家である紫水先生、大塚先生、建築家の鬼丈先生と四代にわたる創作の系譜があります。「偶然はなく、工

程プロセスを考えないと作品にならない。そういう面で工芸と建築は似ている。」との考えを示され、ものづくりの心が二つの領域を超えて確かに継承されていることに気づかされます。また、生活造形の多くに「用と美」が求められるものですが、ここに「技」が加わることで初めて「作品」になる、建築が「建築作品」になるという見解をお聞きして、眼が覚める思いがしました。そして、鬼丈建築の「用と美と技」を支えるのが手と感性であり、素材の技と巧を極めることで東京藝術大学大学美術館に結実したと美瑠さんは再読されています。

大変興味深くお聞きしたのが、鬼丈先生デザインの「伝家の宝塔」という厨子のようなタワーが六角家にはあり、その家系に伝わる過去・現在・未来の時間が空間的に積層する装置として大切にされていることです。このアイデアは家族を超えて、感覚ミュージアムのある岩出山町の地域住民の記憶の装置として「千の小箱」に形を変えて、地域のコミュニティを保つことにも役立てられています。

お話の最後に「再読から継承へ」として、鬼丈先生の遺した光恩寺弁天堂（不忍池）のプロジェクトを美瑠さんが引継ぎ、現代の木造の先端技術を用いて美しい構造空間にチャレンジをしていることが紹介されました。その空間を実体験できる日が楽しみです。

六角鬼丈先生の作品は、達筆のスケッチや素材とマテリアルの技巧を尽くした強い形象に眼を奪われます。しかし、今回、作品を丹念に再読し、人間の心と技、精神性と身体性を切り離すことのない現代建築を深く追求してきたことや、自然の景から導き出し一人ひとりの心に思いを寄せる創作の内面を、参加された皆さんにも感じ取って頂けたように思います。

六角美瑠さんには大変興味深いお話をお聞かせいただき、参加された皆様とともに楽しい時間を過ごすことができました。深く御礼申し上げます。



サロン風景。日本設計本社移転後の最初のイベントとして共同開催。



上：六角美瑠さんの代表作 ORU
右：学生とともに製作した弁天堂モックアップ



フォーラム委員会だより

第 202 回 aaca フォーラム開催報告 「街とアートが織りなす出会いの場」 その 1

フォーラム委員会

7月9日に開催された第202回 aaca フォーラム「街とアートが織りなす出会いの場」(その1)は二部構成で行われ、前半は株式会社三菱地所設計の大会議室をお借りして、三菱地所設計で数々のプロジェクトを手がけられた萩尾昌則氏よりアートと一体になった再開発で変化し続ける丸の内についてご説明いただきました。丸の内の概要説明では、いきなりウルトラマンが現れ、丸の内がウルトラマンとシン・ウルトラマンの活劇の場になったお話、映画「シン・ゴジラ」でも丸の内が破壊されるという導入に参加者の皆様はお話に引き込まれていったようです。

丸の内再開発の魅力は、まずは街区づくりの歴史を継承していることです。明治23年岩崎彌之助が約十萬七千坪の土地を明治政府より払い下げを受け、ジョサイヤ・コンドルが携わった「一丁倫敦」から大正時代の「一丁紐育」の街並みへと移り変わった歴史があり、丸の内の再開発にはこの歴史的価値の継承による新たな価値の創造「継承設計」を踏まえてレイ・デザインにより街並みの表情が揃えられ、「第三世代の丸の内」開発では地元企業も参加した官民一体での街づくりが推進されています。そして街づくりでは「歩いて楽しい街」を目指して歩行者ネットワークがつくられ、大手町から銀座まで雨で濡れない地下道で移動可能な地下歩行者ネットワークが整備されています。そして何よりも高層建築の足元には、パリにある「パサージュ」のような歩いて楽しい、買い物が楽しい空間がつくられ、昭和の建築として初めて国の重要文化財に指定された明治生命館の保存再生(1934年竣工の「明治生命館」と、2004年竣工の「明治安田生命ビル」による街区再開発)では、丸の内の路地文化を復活させて、建物の内部空間に明治生命館が取り込まれて、丸の内のオフィスビルの低層部分が、街を訪れる人たちのオアシスになり、オフィス街が日曜、休日でも人が賑わう街になっています。



フォーラムの後半は、前半のレクチャー内容を体感すべく街へ繰り出しました。

そして新国際ビルと新日石ビルの谷間を活用した「有楽町スリットパーク」へ移動、従前薄暗く活用されていなかった路地であった場所を、光と緑溢れる空間に変え、キッチンカーや路外ショップが出店し、空間に躍動感をもたらすアートが設置されるなど有楽町エリアの新しい出会いのスポットになっています。スリットパークでは、この開発の企画・運営に携われた東邦レオ株式会社の原田宏美氏から、

- ・通路として利用されてきた路地裏空間をフルリニューアルし多目的な活動空間に転用
- ・トークセッションなどの会場機能やキッチンカー展開による飲食機能を整備
- ・wi-fi および電源を各所に完備し、執務空間として常時利用可能
- ・ワークショップなどを通じ、有楽町ならではのコミュニティ形成を促進
- ・有楽町で推進するアート関連の取り組みを始め、大丸有全体で催す各種企画と連携

などの開発の特徴をドリンクで喉を潤しながら伺い、時折ビルの谷間を流れる爽やかな風の中で時を忘れるひと時を過ごすことができました。次回のフォーラムも「街とアートが織りなす出会いの場」(その2)のテーマで11月25日(土)開催が予定されていますので、アートと一体になった街づくりのお話、街歩きをお楽しみください。



(文責：飯田郷介)

— 訃報 — 心からお悔やみ申し上げます。

6月25日逝去 享年83歳

元会員・理事・AACA賞選考委員 **大成浩氏**

「風」と「蜃気楼」をテーマに石の彫刻作品を制作し、国内外の彫刻展で活躍されました。

- | | |
|-----|---|
| 履 歴 | 1965年 東京藝術大学大学院彫刻研究修了
1978・79年 文化庁芸術家在外研修員として米国・イタリア・西ドイツに派遣
元東京造形大学教授
日本美術家連盟理事 |
| 協会歴 | 2009年 第19回 AACA 賞優秀賞「風の地平線-蜃気楼」受賞
2011年 個人会員入会
2013年 理事
2013～18年 AACA 賞選考委員 |
| 受賞歴 | 1968年 第42回 国展国画賞
1987年 中原悌二郎賞
1989年 第13回 現代日本彫刻展 毎日新聞社賞 第18回 長野野外彫刻賞
2011年 文化庁長官表賞
2015年 第41回 長野市野外彫刻賞 |
| 作 品 | 1978年 高尾山薬王院石造天狗面制作、JR中央線高尾駅ホーム
1981-83年 高尾山薬王院四天王像制作、1984年開眼法要
1981年 「祭」魚津水族館（魚津市）
1998年 「風の標識 No.51」ありそドーム（魚津市）
2000年 「風の標識」神奈川県民ホール
2009年 「風の地平線-蜃気楼」海の駅「蜃気楼」前広場（魚津市） |



「風の地平線 - 蜃気楼」



「祭」



「風の標識 No.51」

(撮影：飯田郷介)

編集後記

会報の表紙は、日本建築美術工芸協会賞の第1回受賞作品からご紹介してきましたが、本号で最後となります。本号では第8回受賞の「モエレ沼公園」（札幌市）をご紹介しましたが、「モエレ沼公園」は、“地球を彫刻した男”といわれる彫刻家イサム・ノグチが「公園を一つの彫刻」にするというダイナミックな構想により造成された、イサム・ノグチの最後にして最大規模のランドスケープ彫刻による野外美術館です。今回取材のため10年ぶりに訪れましたが、今なおひとたび公園に足を踏み入るとイサム・ノグチの世界に引き込まれ、大人も子供心に帰って走り回ってしまい、“彫刻的風景としての遊園地”のアートの力強さを改めて感じさせられます。

私は、この11年会報の制作に携わり、本号で33冊目となりました。会報は、新しい体制の下、次の97号よりデザイン・内容が一新されます。日本建築美術工芸協会の理念を協会内外の多くの方々にご理解いただくために、協会の理念を伝え、協会の目指す方向を考えるきっかけとなるコンテンツなど内容を充実させ、より多くの方々を読んでいただける会報を目指してまいります。

(飯田郷介)

 2023.10 no.96

発行人 会長 東條 隆郎
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編 集 広報委員会
委員長 飯田郷介
副委員長 田島一宏
委員 石田真人 勝山里美 金原京子
竹生田正 中村弘子 森田高年
山崎和子 山下治子

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション